九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

木下樹親『セリーヌの道化的空間』

飯田, 伸二
鹿児島国際大学国際文化学部言語コミュニケーション学科

https://doi.org/10.15017/9225

出版情報：Stella. 26, pp.179-182, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

木下樹親『セリーヌの道化的空間』

飯　田　伸　二

一般にセリーヌはふたつの顔をもつ作家と見なされている。すなわち独特の文体や話法により，文学言語の新たな可能性の開拓者としてフランス内外の作家たちに決定的な影響を与えつづける一方，人種主義者・反ユダヤ主義者として未だにフランス本国ではタブー視されているのである。セリーヌの作品に触れ，その独特の文体・話法の虜にならずにいることは不可能といえるほどだが，彼の小説に魅了されればされるほど，読者はなぜこの作家が激烈な反ユダヤ・パンフレの執筆に没頭したのか理解できなくなる。小説とパンフレのあいだに広がる深い矛盾の淵に戸惑い戦（おのの）いてしまうのである。

このように相矛盾する〈小説 / パンフレ〉，〈フィクション / イデオロギー〉あるいは〈書く自我 / 現実の人間〉を「道化的な笑いの観点」から包括的に読み直し，作家の「創作的想像力」[6] を総合的に把握しようと試みた野心作が，本書『セリーヌの道化的世界』である[1)]。以下，章ごとに内容を紹介しつつ，その学術的貢献について一言したい。

本書は 5 章構成である。まず，セリーヌのデビュー作にして出世作の『夜の果てへの旅』を論じた第 1 章は，作品全体を道化芝居として，また主人公バルダミュを道化師として捉える。とりわけ興味を引くのは，物語の導入部で主人公バルダミュが軍隊入りの前に友人と交わす会話の分析であろう。著者は，この会話が「医学生流の冗談」でしかなく，バルダミュが入隊するのも「志願」ではなく「民衆の様子を冷やかし半分の気持ちで見るために隊列に加わっただけ」[21] であることを説得的に論証している。

セリーヌにおけるグロテスク描写の諸相に光をあてた第 2 章では，『なしくずしの死』『戦争』『ギニョルズ・バンド I・II』が分析の対象となる。著者は『なしくずしの死』について「醜化の詩学」[36] という見事な表現を使っているが，これは他の 2 作品ばかりか，セリーヌの作品群全体にも当てはまるキー

ワードと言ってさしつかえあるまい。本書のなかでもとりわけこの章はセリーヌ作品と研究史を熟知した者のみがなしうる鋭い指摘に富むが，最大の貢献は『ギニョルズ・バンド II』第 37 セカンスの初版とプレイアッド版とを比較検討した部分であろう。ここで著者は，両版の精密な検討にもとづき，「無秩序に増殖する奔放なエクリチュール」[73] がいかにして獲得されたか，その結果，どのようにして「複数の時間と空間とをないまぜにした荒唐無稽で多義的な世界が創出された」[72] かを鮮やかに示しているのである。

第 3 章は『皆殺しのための戯言』『死体の学校』『苦境』の分析にあてられる。これら 3 作品は一般には「反ユダヤ主義文書とだけ形容される」[175] ことが多い。だが著者は，セリーヌの反ユダヤ主義を厳しく難ずる一方で，それら一連のパンフレを「丹念に読みかつ分析するあたりまえの作業」が作家を理解するためには不可欠と考える。じじつ，本書はパンフレの綿密な分析を通じ，これらのテクスト群にセリーヌ独自の文学・文体を解明する貴重な鍵が秘められていることを見事に論証している。周到な考察のなかでも特に重要な指摘として以下の 2 点をあげておこう。すなわちまずは，『戯言』の文学論で作家を貫く「被害者意識の強度」は，小説の主人公の性格に投影されているだけでなく，小説そのものの重要な原動力となっているという指摘 [95-96]。また，『苦境』のなかで最も難解とされる最終セカンスこそは，作家としての再生を目的とした「リリシズムに満ちた省略的エクリチュールの創作実験」であるという指摘である [116]。

第 4 章は『またの日の夢物語 I・II』をとり上げている。まず『夢物語 I』について著者は，そこに引用された作家自作のシャンソン「おとしまえ」の分析を手がかりに，「錯綜した憎悪のエネルギー」が道化的滑稽さを伴いながら「無限大に増幅」することが小説創造の核にあると主張する。この作品では，セリーヌが裏切り者と見なすサルトルやクローデル，アラゴンだけが攻撃の対象になっているのではない。ほかならぬ「読者」こそが，「作家を売国奴呼ばわりして処刑を声高に叫ぶ」[126] 最大の裏切り者として描かれているのだ。本書は，かかる読者像が小説の説話構造にも意義深い作用を及ぼしている点を指摘する――「物語の聞き手たる「読者」の台詞が語り手を茶化したり罵倒したりするかたちで頻繁に挿入され」，その結果「語り手は，〈読者〉との対話をとおして，くどくどしい戯言と言えなくもない物語に一種独特のリズム」[125]

を与えているのである。また章の後半では，セリーヌ作品のなかでもとりわけ異彩を放つ『夢物語 II』が論じられる。現実と夢想とを融合し「巨大な錯乱空間」を現出させようと試みた同作において，その「読者」像は『夢物語 I』とは全く対照的であることを著者は鋭く解き明かす。すなわち,「読者」と語り手のあいだでは「皮肉・嘲弄・罵倒の応酬が展開する」のだが，両者は「会話のピンポンを楽しんで」おり，そこには「劇場特有の共犯関係」が成立しているのである。

終章は,『城から城』『北』『リゴドン』からなる〈ドイツ 3 部作〉をとり上げている。まず，3 作に共通する「過剰な反復と脱線によって不連続に進行する語り」[148] の分析では，この特異な語り口が「延々と語り続ける語り手の〈今・ここ〉を臨場感を伴って提示」[152] すべく,「語り手たる作者が聞き手としての読者に向けた言葉を差し挟む」[148] ものであることが，具体的な引例とともに示される。つづいて章の後半では，3 部作の「登場人物たちのエゴイズムと狂気に満ちた言動」がドタバタ喜劇，あるいは漫才との関連から捉えられている。

粗雑な紹介ではあったが，以上が本書の概要である。あらためて強調すべきは，本書がセリーヌ作品にたいし幅広い学識と深い愛着をもつ者だからこそ著しえた一書だということ。その第一の貢献は，デビュー作から晩年の〈ドイツ 3 部作〉にいたる「文体の深化」[152] と同時に，作品群の総体を「道化的な笑い」という主題のもとに明快に描出した点である。とりわけ，未完の『戦争』や難解な『またの日の夢物語 II』にも綿密な考察を加えたことで，恩恵を受ける読者・研究者は少なくあるまい。唯一惜しむらくは，キーワードたる「道化」が，本来は多義的でニュアンス豊かな概念であるのに，本書独自の明快な定義づけを欠いたまま議論が展開されてゆく点である。結論部を見るかぎり著者は〈グロテスク〉〈自己醜化の志向〉〈自己への嘲笑〉などを「道化」構成の要素として重視しているようだが，一般的な「道化」の概念はさらに広い領域にまで及ぶのではあるまいか。著者の道化観がいくぶんか個性的なものであるがゆえに，前もっての丁寧な定義づけが望まれるところであったろう。

本書の第二の貢献は，これまでスキャンダラスな面ばかりが強調されてきた反ユダヤ主義パンフレを文学的観点から綿密に考察・検討したことである。わけても，政治文書としての限界を指摘すると同時に，後続作品群への影響を論

じて，セリーヌの文学的変遷においてそれが占めるべき位置を明確に提示したことは賞賛に値しよう。

木下樹親氏はセリーヌ理解のための最良の書物のひとつを世に問われた。願わくば氏が，今後さらに野心的・独創的な作品解釈によって，「セリーヌの意図」[2] を鮮やかに裏切られんことを。

註

1）木下樹親『セリーヌの道化的空間』，九州大学出版会，2008 年，231-VII 頁。同書からの引用にあたっては本文中［ ］内に頁数を示す。

2）『またの日の物語 II』の分析を終えるにあたり，著者はモーリス・バルデッシュの解釈を批判的に紹介しながら「セリーヌの意図に沿った読み方」[140] について言及されておられるが，作者の意図を鮮やかに裏切ることも読書の醍醐味のひとつであろう。この点については，ピエール・バイヤール『アクロイドを殺したのはだれか』（大浦康介訳），筑摩書房，2001 年を参照。